

平成22年6月8日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530477
 研究課題名（和文） グローバル化における「地域」概念の変容－フランスの周辺地域の文化活動を事例に
 研究課題名（英文） Changing of the concept of “region” in globalization: cases of cultural activities in French region.
 研究代表者
 定松 文（SADAMATSU AYA）
 恵泉女学園大学・人間社会学部・准教授
 研究者番号：40282892

研究成果の概要（和文）：1990年代以降のフランスの「地域」概念の変容について、現地調査から3点を明らかにし、報告書にまとめた。(1)グローバル化する社会における「地域」(region)概念は統治者の支配する空間配置だけでなく、地域主体側が利用する「モノ」としての地域がある。(2)その概念の変化の契機となったのはヨーロッパ統合であり、「地域」文化活動主体が連動するような相互のつながりをもっている。(3)地域文化の資源化を可能にするのは「生産される差異」として地域文化を意識し、運動を継続する意思をもつ運動主体が必要である。

研究成果の概要（英文）：We clarified three points as followings from field works about the transformation of the concept “region” in France after 1990's and summarized it in a report. (1) The concept (region) in globalizing society is not only included space replacement prescribed by the ruler but also “objects” used by regional subjects. (2) It is European unification to have been the opportunity of the change of the concept and it promoted the mutual connection among cultural activists. (3) It is necessary to enable exploitation of resources of the regional culture that the activists have a conscious of it as "a produced difference" and have intention to continue cultural movements.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：地域研究、フランス、地域文化、地域言語、空間、越境性、グローバリゼーション、消費文化

1. 研究開始当初の背景

(1)ベック等が指摘するように、1990年代以降のグローバル化において空間に対する概

念の変容および社会調査における従来の独立変数の再検討が提示されていた。

(2)従来のフランスの地域研究において「地域」を所与の概念としてとらえるか、1960年代の地域主義の概念を踏襲した研究が主要であった。

2. 研究の目的

本研究では、1990年代以降のフランスの「地域」概念の変容について、3つの観点から考察するものである。

(1)その変容を検証するために従来の「地域」概念の整理。

(2)その概念の変化の契機となったであろうヨーロッパ統合における人の自由移動と文化活動における人の交流が活発化と思われ、ヨーロッパの「地域」文化活動の主体が伝統を保持しつつ、ある種の画一性をうながすような相互のつながりがあることの検証。

(3)最後に地域文化の資源化を可能にする要因を分析すること。

そして、この研究課題に含まれるように、「グローバル化」社会を前提とした社会観をもって地域文化の活動と概念の変容をとらえようとするのが特徴である。固有の文化を継承する地域だけでなく、常に外部との接触を図りながら、再構築されていく開かれた体系としての地域という視角を定点としている。

3. 研究の方法

概念については文献資料をもとに整理を行った。

現地調査においては、従来の地域研究は地域ごとに専門的調査を積み重ねてきた担当者によって個別に調査をする方法ではなく、できるだけ複数の研究者で調査地を訪問し、複数の視点から検証することを試みた。オクシタニー文化研究、コルシカ文化研究に従事してきたものがアルザスを観る、またその逆も実施し、それぞれ調査者の主観的な「地域」概念や地域文化活動に対する見方のズレを明らかにし、その違いから調査対象地域の特徴をとらえるという方法である。トライアングレーション (triangulation: 方法論的複眼)、あらゆる制約による誤差や誤謬を、複数タイプの証拠を併用することで解消していく方法に近似しており、複眼的視角によって調査の精度を高め、結果の誤差と誤謬を軽減する方法である。

このような方法論を採用したために、報告書は、各章の執筆分担制をとることが難しく、草稿を1人が執筆し、他の2人が加筆・修正しながら論考を深め、原稿を整えることとなった。

調査対象はアルザスに関しては中力、コルシカに関しては定松が選定・調整を行い、グローバル化する文化に関しては中力・定松によって主に行った。当初、8月9月の調査を予定していたが、対象であるヨーロッパはバカンス・シーズンと年度初めの時期で調査時期としては適切とはいいがたい。そのため、2009年3月に追加調査を、今回の科学研究費補助金以外からの支出により実施した。

4. 研究成果

(1)グローバル化する社会の中の地域

「地域文化」には複数の人々が共有していると思いきめるような「イメージ」が必要である、という第一の条件がある。これは過去とのつながりの中で「伝統」を掘り起こし、創造していく際にも重要な条件である。それは自らの「イメージ」の場合もあれば、他者の「イメージ」の場合もある。このイメージを創造し、想像し、共有させていくときに、現代的な特徴として「グローバリゼーション」が関係してくる。博物館やフェスティバルの運営の仕方、展示の仕方、広報などにおいては、規格としての「グローバル・スタンダード」が用いられる。そして世界人権宣言や国連のキャンペーンなどのイデオロギーや価値としての「グローバル・スタンダード」と連動すると、「グローバリゼーション」は地域文化とその正当性の後ろ盾としても機能する。そしてひとりひとりがみるスケイプが重なり合いながら「地域文化」が作られているのである。

また、地域文化活動の分析において注意すべき点は、グローバリゼーションの第一の現れ方にある格差である。この格差と認識の違いによって同一の「地域文化」は存在しないという視点に立つことが必要になる。同じ「地域文化」と語られる事象や行為がであったとしても、グローバルな空間における階層性があるからだ。地域文化のイメージはある特定の層や集団によって作られ、別の層や集団も交わりつつ実践されるが、他方でその地域文化は別の層あるいは集団によって否定される。つまり、一枚岩としての「地域文化」はほとんどみられないということだ。

(2)「地域」の概念とその変容

フランス語としての *région* は、仏仏辞典 *Le Robert Dictionnaire historique de la langue française*, (1992) によれば、以下のような歴史を持っている。

この単語は、まずラテン語の *regio* 「くに、範囲」といった広い意味を16世紀ごろまで持っていたが、その使用法は次第にせまくなり(中略)、「物質的な特徴の類似またはそこに暮らす人々の共通の起源を単位とするある領域のひろがり(1380年頃)」という支配的

な理念が現れる(中略)。また 16 世紀からは、フランス語圏各国によって歴史的地理的に多様な形ながらも、経済的／行政的な基準によっても定義されるようになった(1559)。この二つの基準を合わせると、*région* は一つの国、または国の集合、大陸などの内部における、比較的広大な実体(*entité*)を意味する。

ただし、フランスで「地域 (*région*)」が行政的な基準で使用されるようになったのが 16 世紀だったとしても、その用語が一定の地政学的・社会文化的意味を担うようになるのは、19 世紀なかばに入ってからであるといえる(1848 年以前には *Régional* という形容詞はほとんど使用されていない(Le Robert))。

「地域主義」概念が初めて現れたのは、第三共和政初期の 1875 年ごろとされる(Grand Robert)。「分権化 *Décentralisation*」とほとんど同義である「地域化 *Régionalisation*」という用語が出現したのは 1960 年であり、中央集権的なフランス政府が、「地域」という枠組みを取り入れた新たな空間編成を試みようとしたのである。

この *régional* なものの変容は、*région* を規定する主体の立場とその主体の政治的企図による。つまり、フーコーの解釈に従えば、境界設定の組み換えを認識様態(エピステーメ)の転換として論じることができる。近代諸科学が成立する場としての言説編成への実践的介入として地政学、地理学があり、その土地をなんと名指すかがその時代の権力の言説編成をしめしているといえよう。

グローバリゼーションの時間と空間の圧縮された世界において、同時代の経済的活動、政治的活動を通しての「地域」は、歴史的編成によっても境界設定が常に変更させられる可能性をもった領域といえることができる。ただし、グローバリゼーション下においては主体と権力のあり方が交錯し、国家のみの対立項として *regionalism* を観ていくことはできない。アパデュライの「スケイプ」の概念を取り入れるならば、その場で支配的な「スケイプ」において、誰が、どのように操作しているのか、空間の解釈の主体と権力作用を分析していくことが肝要になる。

(3)空間としての地域

資本主義的生産関係に場所が利用されることで、商品としての価値を高めるための場所の差異化が行われる。資本が敏感になる場所性である。「空間を生産する」のはある巨大な外部の権力だけではない。地域自治、地方分権という行政が、「自立」という標語のもとに自らを収奪される対象として、資本に対して捧げる状況を生み出してもいる。場所のイメージが作られ、操作される。資本主義市場の中での生き残り戦力として、地域で生活をする人々が、デリダのいう【代補】

(*supplément*)によって消費社会の空間に埋め込まれ、その空間を再構築している。

地域文化や言語の振興を中心とした公共性の高い事業は、自らのアイデンティティや伝統といった時間とのつながり、空間的实践を節合させる「一時的クリップ」として機能している。しかもこの「クリップ」は自然発生的なものではなく、誰かが意図をもって束ねるものである。したがって、「クリップ」でまとめられた「空間」を指摘するのではなく、その際の意図と主体を考察するのが重要である。

(4)商品化される空間としての「地域」

日々再生産される「地域」は、グローバル化の潮流において、ますます空間が空間の生産によってのみ継起できないようになってしまっている。しかし、「地域」が継起される動機、動員される資源、継起を企画・実行する主体、現出させる表象様式、共鳴し・共感する人々など、空間が創出される「地域」の広がり、要素、密度は事例ごとに異なっている。

ここでは、グローバル化の影響を積極的に取り込み、空間的实践を試みる「地域」のいくつかの事例を取り上げながら、空間の創造について考えたい。政治的制約の中の物理的な境を作りながらも、利用している側が政治的「境」を意識できない、その意識が希薄になっているということが、この空間实践の概念にとって重要である。

具体的事例：ユーロエアポート(バーゼル・ミュールーズ・フライブルグ空港)、フランスのオー・ラン県、スイスのバーゼル・シュタット準州、ドイツのバーデン＝ヴュルテンベルク州による *RegioTriRhena*、サルディニア島北部のサンタ・テレサ(*Santa Teresa*)とコルシカの南端ボニファシオ(*Bonifacio*)、フィンランド・ラップランド州のロヴァニエミ *Rovaniemi* とサンタクロス村 *Santa Claus Village*。

(5)他には替えがたいものとしての「地域」

ルフェーブルは「意味の転用は、支配と領有を媒介し交換価値と使用価値を媒介とする実践とみなすべきである」とし、空間の科学は使用価値に属し、社会科学は交換価値に属しているという。「地域性」という特異性は差異によって認識されるものだが、現在の地域文化の表象においては、技術や構造物、そして表象形式においては交換価値になっていない場合、存続が難しくなっている。ホームページでのイメージの演出、アクセスする場合の利便性、リーフレットやポスターの大きさ、グローバル基準でランク付けされる味の質や見た目など、戦略の平面で、諸種の資源がつねに位置を定められ、単位ごとに評

働が行われる。

「地域」の差異という場合には、特殊性を前提とした「誘導される差異」が市場においてみられ、特殊性を前提とした「生産される差異」は独立を求める「地域」の根拠として表出する。

ただし、アーリ(Urry)も批判しているように、ルフェーブやハーヴェイの議論に欠けているのは、権力と階層の視点であり、ジェンダー視点やマイノリティ視点がない。空間としての地域分析に「誰が」という主体と「どのように」「どのように」という実践の相互作用において生じる権力の不均衡性について、注意深くならなければならない。

ここでは、「地域」文化活動のさまざまな位層を、「地域」を空間として作り出す主体に着目し、同じ地域の中の「誘導される差異」と地域ごとの違いの特殊性が、環境や歴史を編成する意図をもち、継承する意志を持つ人々によって日々創造されていることを考察した。

具体的事例：アルザスのオー・ラン県で地域言語文化の普及や二言語教育問題担当者、アルザス「旗とワイン」の展示、コルシカのNGO博物館 ADECEC (Association pour le Développement des Etudes Archéologiques, Historiques, Linguistiques et Naturalistes du Centre-Est de la Corse)、ミュールーズの地域の博物館、コルシカの国立博物館。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① SANO Naoko, “Una lenga en chamin – l’usatge de l’occitan dins la Valadas Occitanas d’Itàlia” in *La Voix Occitane-Actes du VIIIe Congrès de l’Association Internationale d’Etudes Occitanes* (AIEO), 査読有, Presses Universitaires de Bordeaux, Tome II, 2009, pp.965-980.
- ② 定松文, 「移民と言語一人は移動するという前提から言語と社会をとらえる」、多言語社会研究会、『ことばと社会』、11号、査読有、三元社、2008、pp. 10-29.
- ③ 佐野直子, 「言語の『文法』—多言語社会における社会言語学研究」、多言語社会研究会、『ことばと社会』、第10号、査読有、三元社、2008、pp. 94-119.
- ④ 定松文, 「言語と権力への視座—ピエール・ブルデューの言語研究とその応用をめぐって」、多言語社会研究会、『ことばと社会』、第10号、査読有、三元社、2008、pp. 159-174.
- ⑤ CHURIKI Eri, *Quel « enseignement bilingue »*

en Alsace ?, *Nouveaux Cahiers d’Allemand*, 2007- no.4, 査読有, 2007.12, pp.369-388.

[図書] (計 6 件)

- ① 定松文, 「コルシカ」、『地中海ヨーロッパ』、朝倉書店、2010、pp. 285-290.
- ② 定松文, 「新たな文脈の中での地域主義」、日本社会学会社会学事典刊行委員会編、『社会学事典』、丸善出版、2010、6枚相当.
- ③ SANO Naoko, *Una lenga en chamin/Una lingua in cammino/A language on the way/途上の言語*, 2008, Chabira d’òc(Itàlia).
- ④ 定松文, 「グローバル化する社会における主体としての『地域』」、宮島喬・若松邦弘・小森宏美編、『ヨーロッパにおける地域の多層化と変容』、人文書院、2008、pp. 25-43.
- ⑤ 中力えり, 「フランスにはなぜマイノリティがないのか—共和国の虚実」、岩間暁子、ユ・ヒョジョン編、『マイノリティとは何か—概念・政策・現状の比較社会学』、ミネルヴァ書房、2007、pp. 95-118.
- ⑥ 中力えり, 「地域語と外国語の間—アルザスにおける『ドイツ語』の教育をめぐって」、岩間暁子、ユ・ヒョジョン編、『マイノリティとは何か—概念・政策・現状の比較社会学』、ミネルヴァ書房、2007、pp. 355-370.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

定松文 (SADAMATSU AYA)

恵泉女学園大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：40282892

(2) 研究分担者

中力えり (CHURIKI ERI)

和光大学・現代人間学部・准教授
研究者番号：50386520

佐野直子 (SANO NAOKO)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：30326160